

派遣者番号	R3K21	氏名	和久井 智洋
研究主題 一副主題一	図画工作科におけるArts-Based Researchに基づく芸術的な探究の学びとカリキュラム構成の研究 ービジュアル・ナラティブによる対話的で生成的な評価からー		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	笠原 広一
所属	東久留米市立第十小学校	所属長	古矢 美雪

キーワード：学習評価 カリキュラム Arts-based Research ナラティブ

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

本研究は、探究をベースにした学習活動に焦点を当て、図画工作科における芸術的な探究に基づく学習と評価の在り方を明らかにし、そのカリキュラム構成の在り方と可能性を考察することである。

グローバル化が進展し多様化する現代社会に対応する資質・能力を育成するために、これまでの知識中心の教育から脱却を図るためのカリキュラム改革が国際的に進んでいる。そのような潮流の中で注目されるのが、問題解決的な探究をベースにしたカリキュラム構成や学習である。

日本においても高等学校では、総合的な探究の時間や古典探究、日本史探究、世界史探究、地理探究、理数探究といった科目が新設され、STEAM教育が推進されようとしている。また、小学校においても、「習得・活用・探究という学びの過程」という深い学びの視点からの授業改善が求められ、教師が子供一人一人に応じた探究的な活動に取り組む機会を提供し、子供自身が学習を調整していく「学習の個性化」と、子供一人一人の特性や学習進度に応じて柔軟な学習設定を行う「指導の個別化」を合わせた「個に応じた指導」を充実し、子供自身が「個別最適な学び」を進められるようカリキュラム・マネジメントの充実やきめ細やかな指導等が求められている。また、総合的な学習の時間において探究的な見方・考え方に基づく「横断的・総合的」な学習を行うことが示されている。このように、探究的な活動が「横断的・総合的」に実践される中で、芸術や美術は、ものを創るといった側面からその役割を担っているが、芸術制作が本来もつ、美的体験を重ねながら探究的にもものを創り出していくという特性との違いもあると考えられる。

一方で、美術教育の分野では、芸術表現に基づく研究として、アートベース・リサーチ (Arts-based Research、以下、ABRと表記。) という新たな方法が展開されている。そこで、図画工作科においても、ABRの概念や実践方法を取り入れ、芸術に基づく視点から探究的活動を考察することで、芸術表現の特性を生かした探究的な学びの可能性を示すことが

できるのではないかと考える。

その際、芸術に基づく実践を図画工作科の学習活動として位置付けていくためには、探究的な方法論や理論を概観するだけでなく、図画工作科が抱える評価の現状や課題、芸術表現がもつ特質を踏まえたカリキュラム構成から現状の枠組みを問い直す必要がある。

そこで、本研究では、図画工作科における芸術的な探究に基づく実践とその評価の在り方を明らかにし、芸術的探究の視点から図画工作科のカリキュラム編成の見直しを図り、新たな学習の枠組みを見いだすことを目的とする。

2 研究の方法

まず、学習科学に基づく探究的な学習理論や方法について概観し、科学的な探究の特徴を明らかにする。次に、ABRの理論や方法について概観し、科学的探究との比較から芸術的探究の特徴を明らかにしていく。その上で、評価の方法をナラティブ（語り、物語）、ビジュアル・ナラティブといった概念や方法を用い、アセスメントという評価の概念によって位置付ける。そして、芸術的探究に基づく実践を、ビジュアル・ナラティブ・アセスメントによる形成的（オン・ゴーイング）評価によって、図画工作科の学習活動への位置付けを考察する。さらに、カリキュラム・マネジメントの概念から、教科横断的な芸術的探究に基づく単元のカリキュラム構成を考察する。

3 研究の結果

本研究では、科学的探究と芸術的探究 (ABR) に基づく活動の概念や方法を概観し、その位相から図画工作科における芸術に基づく探究活動の在り方を考察した。芸術的な探究は、表現への欲求と美的体験における個々の「生きた探究」に基づく非論証的な方法による活動となるとともに、従来の探究型の学習との違いがあり、新たな知を生み出していく研究方法であることが分かった。それは曖昧で多義的であるゆえに、解釈や意味付けをする作者や他者の

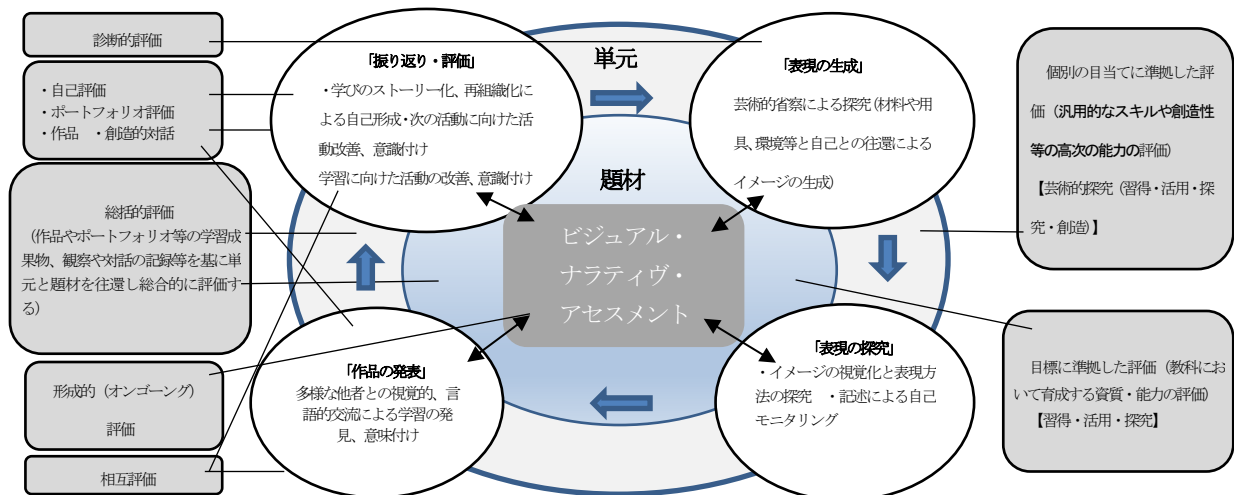


図1 ビジュアル・ナラティブ・アセスメントによる対話を中核に据えたカリキュラム

存在が重要となり、柔軟で協働的なカリキュラム構成の必要性を論じた。その方法をビジュアル・ナラティブ・アセスメントという概念と方法による、対話を中核に据えた目標生成型の学習と評価のサイクルに題材と単元とが複層的に構造化されたカリキュラムとして提起した。(図1)

4 研究の考察

(1) 子供の自己評価と教師による評価の統合

本研究から明らかになったことは、第一に芸術的探究に基づく実践では、形や色といった造形性に加え、作品を創り出す探究プロセスや作者のコンテキストが重要となることである。プロセスやコンテキストの重視は教師による評価を複雑化させ、作品解釈のための対話という評価プロセスを生み出す。作品を言語に翻訳することは創造的な解釈となり、それをビジュアル・ナラティブという対話的なアセスメントとして位置付けることで、子供の自己評価という個人に準拠する内的な評価と、教師による外的な評価とを統合する形成的(オンゴーイング)評価となることが分かった。

また、ビジュアル・ナラティブ・アセスメントは、学習の可能性を子供と教師が対話的に探究し、信頼関係を築いていく。それにより、学習(評価)活動や教室という場の在り方や雰囲気といった「隠れたカリキュラム」が編み直され、子供と教師が主体となり、協働的で個に基づく探究的な学習活動と評価が一体的に生成されていく可能性を見いだした。

(2) 自ら学習を調整し生成する創造的な学び

第二に、芸術的探究に基づく実践をビジュアル・ナラティブ・アセスメントによってカリキュラムを構築することで、子供は表現を通じた芸術的省察や、対話や記述による自己省察が多様な機会から促され、自らの思考を物語的に解釈、組織化し学習を調整していくといったいわゆるメタ認知に関わる力

を発揮し、そこでの気付きから表現を更新していくというように、表現と自己省察の往還から学習を作り出していくことである。つまり、芸術表現という複雑で曖昧な活動の質を多様な可能性から解釈し言語化していく力、「鑑識眼」と「批評」の力を子供自身が発揮し、それによって活動を意味付けながら判断し行動していくことで学習を生成していく可能性を見いだした。

このような自らの欲求や感性に基づき、複雑で曖昧なものから意味や価値を省察的に見だし、学習を調整し生成する創造的な学びの在り方は、論理を超えた感性的な知の統合であり、これまでの知識や経験といった論理が通用しなくなる「VUCA化」していく社会を自律的、創造的に生きて抜いていくための生きた資質・能力となる。

5 今後の展望

課題は、対話的で生成的な評価はそれぞれの子供に準ずるため、評価のデータが大量で複雑化し、評価の負担が増えるといったことが考えられる。その対策として、ICT機器の活用が必須となるが、効率性と両立を図るために、今後実践と検証を重ねる必要がある。

さらには、評価の準拠点が共通の目標に基づくフィードバックばかりではなく、個々のめあてに準拠する生成的な対話が主となるため、これまで以上に教師の「鑑識眼」と「批評」の専門的な力が求められる。また、創造性や汎用的なスキルといった高次の思考能力を高める学習活動をどこまで教師が捉えることができるのか、その実践の在り方と検証を重ねながらよりよい方法を構築していく必要がある。そのためにも立場の異なる評価論も踏まえながら引き続き研究を重ね、芸術的探究に基づく実践と評価の可能性を探究していくことを今後の展望としたい。